

# 音楽科の主張

兵庫廣多

## 1 教科で育みたい人間像

音や音楽には、人々の心を動かし、豊かにしていく力がある。音楽は古くから儀式や祭りなど、歴史や人々の生活とともに存在しており、様々な音楽のジャンルが互いに影響しあい発展してきた。歴史や文化的背景をもつクラシック音楽や、世界各地の伝統的な音楽、新しく生み出されるポピュラー音楽など様々なものがありそのどれもが固有の価値をもって存在している。そのような音楽の価値を感じ、受け止めようとすることで感性がより磨かれ、音楽そのものの価値を尊重することにつながっていく。このように多様な音楽の価値を尊重する姿勢は、時代や思想を越えて人々の思いに寄り添い共感するということであり、音楽を通して自他を尊重する心豊かな人を育むことができるだろう。

さらに、現代においても音楽の発展や広がりには限りがなく、好きな歌手や自分が気に入った音楽をオンライン配信等で気軽に選び、楽しむことのできる時代となった。自らの生活に音楽を取り入れ、音楽を聴いたり演奏したりする人は、多くの人と同じ時を共有し、その時々感情を共有することで時として言葉で表現できないほどの感動的な体験をすることができる。自ら音楽とかかわろうとすることで音楽による感動を味わい、音や音楽を自分にとってかけがえのないものだと感じるようになるだろう。このような人は音楽を愉しんでいる人と言えるのではないか。

私たちは音楽科を通して、「自ら音楽を<sup>たの</sup>楽しむ、心豊かな人」を育みたいと考えている。

## 2 教科で願う子どもの学び

私たちが願う子どもの学びとは、「音楽に対する感性を働かせながら、音や音楽と向き合うこと」である。子どもたちは様々な文化的・歴史的背景の中で醸成された音楽にふれたり、自分がつくった音楽を仲間と聴き合ったりする体験を通して、音楽の価値や美しさを感じ、音楽には多様な受け止め方やよさがあることに気づいていく。音や音楽は目に見えず、時間とともに消えてしまう瞬間の芸術であるからこそ子どもたちは、感性を豊かに働かせながら音や音楽と向き合っていくのである。このような過程を通して、子どもたちは音楽に対する考え方を広げたり、深めたりしていこう。

音や音楽は、「自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化など」とのかかわりの中で、人間にとって意味あるものとして存在している。授業を通して、世の中にある音や音楽と出会い、様々な音楽がもつ固有の価値を尊重し、その多様性を理解できるように学びを展開していきたい。そのためには、音楽を「つくる人」「演奏する人」「聴く人」といった立場を体験することが、音楽との理想的なかわり方であると考えられる。子どもたちの「自分も取り組んでみようかな」「頑張ればできそう」という思いを大切に、音楽経験の異なる子どもたち全員が、ためらうことなく心を解放して積極的に音楽活動に取り組むことのできる雰囲気をつくっていきたい。願う子どもの学びを実現していくために、音楽科では、題材のもつ価値を吟味し、子どもが「何でこうなるのだろう」「以前学習した曲と似ている部分がある」「この曲は今までと違う雰囲気があるぞ」などの、音楽への思いが生まれるような題材選定を行いたい。

題材との出会いを通して、中学生の今しか感じることでないみずみずしい感覚で音楽を経験することができるはずである。仲間との様々な音楽の経験を通して音楽文化に幅広く親しみ、人生を豊かに歩むことができる子どもを育みたいと考えている。「音楽に対する感性を働かせながら、音や音楽と向き合うこと」を通して、中学校の音楽の授業だからこそ育むことのできる、子どもの学びを実現させていきたい。

# 本年度の授業実践と分析

## 授業実践 1



1 題材名 「ポピュラー音楽の魅力 ―デキシーランドジャズ『聖者の行進』―」（第3学年）

### 2 本題材で願う学び

ポピュラー音楽のルーツである初期のジャズ音楽を演奏することを通して、ポピュラー音楽ならではの演奏表現やその楽しさを実感し、多様な音楽文化についての理解を深めるとともに音楽に対する考え方を広げたり、深めたりする。

【学習指導要領との関連：A表現(2)ア イ(7)】

### 3 本題材の実際の流れ

時間	問い	学習内容
1	ポピュラー音楽のルーツとなったジャズ音楽とはどのような音楽なのか	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ジャズ音楽と出会う</li> <li>• モダンジャズ、スイングジャズ、デキシーランドジャズの鑑賞を行う</li> </ul>
2	聖者の行進はどのような曲なのか	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 楽器のアンサンブルに挑戦する</li> <li>• 楽譜を見ながら演奏する</li> </ul>
3～5	ジャズらしさを大切にしながら、ジャズアンサンブルを演奏するためには	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ジャズらしさとはなにかを全体で共有</li> <li>• リズムや旋律を自分たちなりに変化させて、ジャズらしく「聖者の行進」を演奏する</li> </ul>
6	他のグループと演奏を聴き合おう	<ul style="list-style-type: none"> <li>• グループごとに「聖者の行進」の演奏を聴き合う</li> <li>• ジャズらしさの視点で、仲間の演奏にアドバイスを送る</li> </ul>
7	最後の演奏の仕上げや手直しをしよう	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 次回の発表に向けて、自分たちの演奏の仕上げを行う</li> </ul>
8	グループごとに演奏を発表しよう	<ul style="list-style-type: none"> <li>• グループごとに演奏の発表を行う</li> </ul>
9	ポピュラー音楽のよさとは	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ポピュラー音楽（ロック、ブルース、ボサノヴァ等）について鑑賞を行う</li> <li>• ポピュラー音楽について感じたことを語り合う</li> </ul>

### 4 「ありたい自分」を思い描く子どもについて

#### (1) 「ありたい自分」を思い描く子どもの姿とその場面

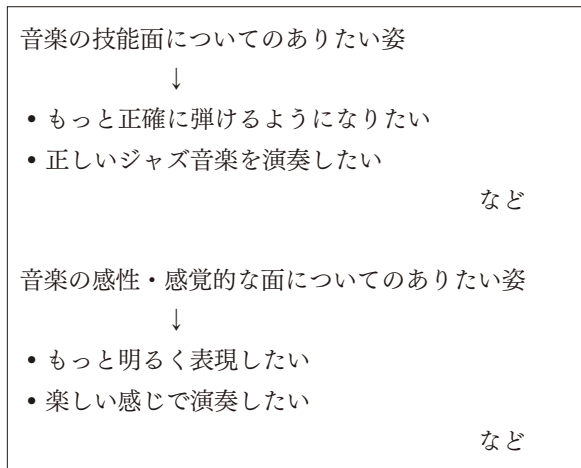
ポピュラー音楽にはクラシック音楽にない親しみやすさやわかりやすさがある。今日でも音楽の世界が発展しているのは20世紀以降にポピュラー音楽が大衆向けの音楽として人々に愛されてきた時代背景があるからだろう。

子どもたちはポピュラー音楽ならではのよさを味わいながら演奏することで、多様な「ありたい自分」を思い描く姿を表出していた。特に第3時の「ジャズらしさについて共有」する場面と、第3時から第5時における「ジャズらしさを大切にしながら、ジャズアンサンブルを演奏する」場面において顕著に「ありたい

自分」を思い描く姿がみられた。

#### ①意見を共有しながら「ジャズらしさ」についての考えていく場面での子どもの姿

「追求の記録」のレポートや学習者へのアンケートを分析することにより、本題材における「ありたい自分」を思い描く姿について考察していく。特に「ありたい自分」を思い描いている姿の中でも「もっと音楽っぽく考えたい」「音楽の授業ではこうありたい」という、教科の対象世界と向き合う姿について分類し、考察を行った。



本題材において「技能面のみを追求」することや「正確に演奏すること（クラシックの理論にのっとった音楽面での追求）」を授業者は求めている。ジャズらしさについての考え方を記述した子どもたちの記録を「技能面のみを記述（試行錯誤している記述）」「技能面と気持ちや感情の両面で記述」「クラシック的（こうしなければならない）記述」で分類した。

表1 追求の記録 あらわれの変容

	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時
技能のみ	18人	13人	18人	8人	5人	5人
感性と技能	9人	16人	12人	20人	14人	16人
クラシック的	0人	0人	1人	4人	12人	10人

表1からわかるように、子どもたちは第2時（演奏してみる）には技能面でジャズらしさを追求している人が多いことがわかる。第3時では「ジャズらしさ」を全体共有（図1）したことにより、「吹き方」「はねるリズム」「ずらす」「音」などに視点が広がり追求していったが、感性と技能の両面での記述が16人になったことから、感性を働かせながら追求していることが伺える。



図1 全体共有の板書

感性と技能の両面で記述している人が、第4時（練習1）12人、第5時（練習2）20人と増えた後に、第

6時（聴き合い）14人、第7時（手直し）16人となっている。第7時（手直し）では、第6時（聴き合い）でアドバイスを受けたことや、他グループを見て感じたことをもとに、さらにジャズらしさの視点がが増えて追求していく記述が見てとれた。

ありたい自分には技能面と感性、感性的な面が行ったり来たりしていると考えた。始めは音やリズムを工夫していく中で、もっと感性的に「～したい」という思いが芽生え、そのイメージを試行錯誤しながら、音と向き合い、発見していく。イメージと音が関連づいたとき、さらに、よりよい音やイメージを追求していきたいという思いが生まれるのだろう。

#### 【ありたい自分を思い描く要因について】

第2時に演奏してみることで「音と向き合う」経験をした子どもたちは、第3時でジャズを聴き「全体でジャズらしさを語り合う」ことで、視点を広げることができた。第3時に技能面も感性の面で追求の記録を記述している子どもが16人に増えたことがこれを示している。

子どもたちは自分たちが聴いた聖者の行進や、もともと知っていたジャズのイメージをもちながら、「～したい」という思いを育むことができた。「グループで演奏しながらジャズらしさを追求すること」は子どもの「ありたい自分」の姿を育むことにつながっている。その根拠としては第5時に技能面と感性的な「ありたい自分」が20名に増加していることがあげられる。語り合いによって得られた視点と自分たちのもつジャズらしさが合わさることで、音と向き合っていると言えるだろう。また、聴き合いをすることで以下のような記述がみられた。

- 今日は見せ合いをした。Cさんたちのチームは音の混ざり合いというより、鍵盤の色々な音を混ぜてそしてリズム感を出して引いていた。シャープとか使っていたので、私たちのチームにもシャープを使うことがいいと思った。
- 他のグループの演奏を聴いてみて、うまいグループはやっぱり楽しそうに活気に満ち溢れた状態でやっていたから、気持ちの面も大事だなと思った。

これらの記述にあるように、子どもたちはさらに視点を広げ、自分たちのジャズらしさが定まってきたり、イメージと音を関連づけたりしていた。この経験は、より身近に技能面と感性の両面で「ありたい自分」を思い描ききっかけとなっただろう。

②ジャズらしさを大切にしながら、ジャズアンサンブルを演奏する場面における子どもの姿

ここでの3時間は、子どもたちが各々に見いだした「ジャズらしさ」をもとに、演奏表現が自分たちの表現したい音楽になっているのかを確かめながら試行錯誤した。授業者は演奏の形態については指定しなかったが、ソプラノリコーダーのアンサンブルやキーボードとトランペットなど、4～6人の演奏者を自分たちで募り、自分たちで使用する楽器を決め、仲間と協力して演奏表現を追求しやすいメンバーを自然と求めていく姿がみられた。①でも論じた部分と重なるが、全体で共有されたジャズらしさは以下のような要素が共有された(図2)。

共有の場面での意見	音楽的な要素との関連
音が混ざり合う	音色、和音、テクスチャ、調性
明るさやノリを生かして演奏する	曲想、音階、調性
奏法によって吹き分ける	スタッカート、タンギング
音をずらして軽快さを醸し出す	シンクペーション、装飾音符、リズム

図2 ジャズらしさの共有

【「音が混ざり合うこと」を追求したグループ】

これらの要素をもとに追求を進める場面において見とることができた、子どもたちの「ありたい自分」を思い描く姿について以下に示す。なお、子どもはそれぞれA・Bとした。(Aの担当はキーボード、Bの担当はピアノ)

- A ねえ、キーボード二台使うのはどう？  
 B いいね。一人で二台弾くってこと？  
 A そうそう。右手と左手で違う音で弾けたら豪華な感じがすると思うんだけど。  
 左手はもっといろいろなリズムを入れてみたいな。  
 B 全部同じ高さだと面白くないから、聴く人に刺さる演奏にしたいね。そんなことできる？  
 (Aがいろいろな調で演奏を試してみる)  
 A やっぱり、途中で使う音を変えてみるね。  
 B 高さを変えるってこと？  
 A そう。  
 B いいんじゃないかな。やってみよう。

(ト長調とハ長調を同時に演奏してみる)

- A うーん。おかしいな。単体で聞くとかわいく聞こえるのになあ。  
 B 混ざったときのことを考えなきゃいけないのかもしれないね。  
 (対話記録のため、表現は筆者が修正を加えてある。)

このグループでは、ジャズらしい曲を追求する中で、音の重ね方に変化をつけたいと考えていた。A「右手と左手で違う音で弾けたら豪華な感じがする」という発言から読みとれるように、音の変化をつけて音楽を表現したいと考えていた。キーボードとピアノの音を同じ高さで重ねるのではなく、途中から調性を用いてメロディーを重ねることにより、新たな表現方法を見いだそうとしたようだった。そこで、始めにハ長調で演奏を行い、その後ト長調で演奏を重ねるようにした。それぞれの調で演奏したときには自然に聞こえていた旋律であっても、5度離れた音を同時に重ねることにより不自然な音の響きになると感じ、違和感をもったようだった。そこで子どもたちは様々な調性で旋律を演奏しながら、心地よく聞こえる旋律の重ね方を選択していった(図3)。



図3 ト長調とハ長調の旋律を記録したノート

結果的にハ長調のピアノで曲が始まり、ト長調とハ長調で同時に演奏するキーボードが加わり、後半でニ長調に転調するという、このグループならではの曲が完成した。

この一連のようすから、音の高さや重ね方に注目しながらよりよい表現をめざす子どもたちの姿が見とれる。B「混ざったときのことを考えなきゃいけない」という発言からは、音の高さが心理的に与える影響の



大きさに気づいていることがわかる。授業者が指示したわけではなく、子どもたちが自ら選択して転調したり同時に別の調性で演奏したりすることで、ジャズらしくなると考えたからだろう（動画1）。



動画1 音の高さを重ねる演奏例

【曲想（曲の明るさ・暗さ）について考えたグループ】

曲想について注目した別のグループは、曲の雰囲気をも明るくしたり暗くしたりする要因の一つに、黒鍵の存在があると認識していた。具体的には、#を入れて、音を高くすることにジャズらしさを感じていたのだろう。それはAへの授業後のインタビューで「高い音の方が陽気に聞こえると思っている。暗いときに音を下げたりしたんですけど、シャープにすると音が上がって、陽気になるっていうのが、前回の演奏を聴き合う場面で感じた。他の班が高めに音を演奏していたのがジャズっぽいと思った。」という発言があったことにも裏付けされている。半音上げることで陽気さを表すことで、ジャズ特有の明るさが表現できると考えている。しかし、半音上げての演奏は運指の問題や、転調という壁にぶつかり、なかなかうまくいかない。

「普通にソをシャープにしてみるとか。」と提案するAに対して、Bが「それだとたぶん不協になるよね」と答えているように、音があつかる不協和音には違和感を抱いていることがわかる。

また、Cが「レのシャープが難しい…。ソシドレのレの部分。さっき、Dと話したけど、すげー難しい」と言っているように、自分たちのイメージを演奏で表現する難しさがあったようだ。

インタビューでは次のような会話があった。

- A 「高くしてみたらどうかなって、検証。」  
 D 「そしたら、何か暗くないかな。」  
 A 「ちょっと違うと思う。とても暗くて違和感がある。」

この対話からは、シャープを使って陽気なジャズを表現しようとしたが、Bが授業中に言っていたように

不協和音が多く、暗いイメージになったことで、「何か違う」という気づきが生まれたことがわかる。この「暗いイメージ」もまた、このグループにとって、一つのジャズの要素にはなっていたが、もともと陽気な表現をしたかった部分でも、暗さが出てきたことに戸惑ったようだ。しかし、この「何か違う」という気づきも、音や音楽に対する感性を磨いていく上ではとても大事な部分だと考えている。

このような姿から、「子どもたちが表現したい音楽」と「子どもたちが（技量的に）表現できる音楽」のギャップを授業者としてどのようにとらえるのか、また、そこにも「ジャズらしさとは何かを演奏で表す」ということの本質があるのではないかと考えた。

本時において子どもたちは「暗い雰囲気」をつくることにもこだわっていた。その理由をインタビューで聞くと次のような話があった。

- C 「カフェとかに行ったときに、暗い感じのジャズの曲が流れていた。それをやってみたくて、暗いというか静かというか、そういう感じのジャズの曲をやってみない？と言った。」  
 A 「音階を下げたままで、跳ねるリズムはそのまま継続する。アレンジはしていく。ただ暗くてゆったりした音楽だと、お化け屋敷。だから、暗い感じのやつはバーとかで流れてるじゃん。そういう感じを表すためには跳ねるリズムは大事だと思って思います」  
 E 「暗い方のジャズはコーヒー店で流れているようなジャズの曲があって、ジャズじゃないって言うわけではない。一般的なイメージとして明るいイメージが強いついていうだけ。」

このように、子どもたちは「陽気な感じ」だけがジャズではなく「暗い感じ」にもジャズらしさを感じていることがわかる。それを「カフェとかに行ったとき」「バーとかで流れている曲の雰囲気」「コーヒー店で流れている」とあるように、自分たちの経験と結びつけてジャズらしさをとらえている。このイメージを表現するために授業中では以下のような対話があった。

- C 「レのシャープかも」  
 C 「シャープ？わかんない、なんかぼいのが出ただけ。ごめん絶対音感がないから、できない、わからない」  
 B 「もはやオクターブが上だよ」  
 C 「上だね、まあそんな感じがする」

再び個人練習を行う

A 「暗いのできました」

Aの演奏を聴く

全員「こわっ」「暗いね～」

この場面は、陽気な感じを求めてシャープを取り入れていたはずなのに、演奏してみると暗い感じになったと報告している場面である。暗くすることは前時までに提案されていたが、Aが自分の演奏に「暗さ」を感じたところから、暗い表現をどうするかという話題になっていく。そこでCが「音の幅を保ちながら、なんか違う音を出すやつだったらできるかもしれないよね、そのへんで」と言っているように、音の幅や違う音に注目して、暗い中にもジャズらしさを求めようとしている姿が見られる。

その中で、全員で演奏した感想が以下のようにになっている。

全員「ジャズっぽくないね」「ジャズじゃない」「ジャズじゃないね～」

B 「今ちょっと音を減らしてみた」

A 「これでやってみる？」(半音？ずらしたバージョン)

B 「じゃあ、それでやってみる？」

A 「暗さを保ったまま、ジャズ」

B 「じゃあ1回やってみる？」

C 「やってみる、暗さを保ったままジャズ」

C 「めちゃくちゃ難しい」「俺1回下げようかな」

演奏を行う

E 「葬式だよ」

D 「暗くしよっていったんだろ～」

C 「だんだんクラシックになってきている」

B 「なんかこんな感じ(下り調子)だよ」

E 「いや、3回目で明るくすればもう！」

B 「いいかな!？」

F 「あっ、ギャップを狙う！」

全員「ギャップを狙おう」

A 「なんか暗いの聞いた後、音全部暗く聞こえる」

このように、ただ暗いだけの演奏では、「ジャズっぽくない」と全員が評価している。(これは、シャープを個人が好きなように入れていくことで不協和音が増え

ていくために暗い感じになったと、分析者は考えている。)授業の中でどのような暗さがジャズらしさなのかということは語られなかったが、子どもたちの中では共有されていることもわかる。ここでポイントとなるのはAの「ただ暗くてゆったりした音楽だと、おけ屋敷。だから、暗い感じのやつはバーとかで流れているじゃん。そういう感じを表すためには、跳ねるリズムは大事だなって思います」という発言である。バーで流れる暗い感じの曲にするためには「跳ねるリズムは大事」と考えている。つまり、「跳ねるリズム＝陽気な感じ」だけでないということである。これは子どもたちがしきりに言っていた「暗い感じ」のニュアンスが見えてくる発言である。さらにEが「こっちは不気味な暗さなんです。不協和音を混ぜて違和感からの不気味さがきて暗く感じる。コーヒー店で流れているジャズは、静かに心を穏やかにさせるジャズなんですよ。」と言っているように、子どもたちがめざしたのは「静かに心を穏やかにさせるジャズ」であったということがわかった。このニュアンスを演奏でどのように表現していくか、ということが子どもたちの「なんか違う」という感性を働かせることにつながっていると考えられる。

### ③題材構想をする上で留意したこと

①、②の分析から、本題材では、「ジャズらしさについて共有」する場面と「ジャズらしさを大切にしながら、ジャズアンサンブルを演奏する」場面と「ありたい自分」を思い描く姿が現れた子を見いだした。特に「ジャズアンサンブルを演奏する」活動の中で多様な「ありたい自分」を思い描く姿を表出していたことには音楽の授業ならではの特徴があるのではないかと考えられる。

子どもたちが題材と出会い、音楽の対象世界の入り口として演奏活動に入っていき際に一番の障壁となることは、扱う音楽自体が自分事となり得るのかという点である。本題材において第1時のジャズ音楽との出会いの場面では以下のような発言がみられた。

- なんかも今までに聞いたことのある音楽って感じがする
- 「シングシングシング」の始まりのドラムの部分が「おさるのジョージ」のオープニングの曲にそっくりだ
- (その発言を受けて)「おさるのジョージ」のオープニングの曲の原曲版は雰囲気違ってもっとジャズっぽくてかっこいいんだよ
- この曲は「聖者の行進」っていうんだ！クリスマス

スシーズンによく聞く曲だからクリスマスソングだと思っていた

- 「聖者の行進」ってもともとジャズの曲だったのか

これらの発言から「聖者の行進」の旋律は学習者にとって今までに聞いたことのあるメロディーであり、すぐに自分たちに馴染みのある音楽という認識をもつことができたのだろうと考えられる。これは音楽自体がもつ固有の価値であり、曲について学習者が当事者意識をもつことが容易であったという表れである。また、ペンタトニックコード（音階の中の5音で構成されている）で作曲されている音楽であることも、曲に親しみをもつことができた大きな要因だったと授業者は考えている。

以上のことから「聖者の行進」自体がもとの旋律から自由に演奏表現を変化させやすい題材であったのではないかと考えられる。もともとの旋律のもつ音やリズムを変化させることでポピュラー音楽ならではの、演奏する楽しさを見いだす姿がみられたのではないかと推察した。

## (2) 授業者の「教科で願う学び」との関連

この題材を構想するにあたり、授業者は子どもたちが「自己のイメージや感情」を「演奏する人の立場」となって体感することで、音楽に対する感性をより働かせながら演奏活動に取り組むことを願って本実践に取り組んだ。

また、ポピュラー音楽ならではの演奏表現やその楽しさを実感し、多様な音楽文化についての理解を深めるとともに音楽に対する考え方を広げたり、深めたりすることを題材で「願う学び」としていた。

この「願う学び」は音楽の主張における「教科で願う学び」を本題材に落とし込んだ際の具体であると解釈できる。以下は本題材における「教科で願う学び」を要素ごとに抽出したものである。

表1 本題材における「教科で願う学び」の要素

「教科の主張（教科で願う子どもの学び）」から抽出した要素
(i) 音楽に対する感性を働かせる
(iii) 音楽の価値や美しさを感じ、音楽には多様な受け止め方やよさがあることに気づく
(ii) 音や音楽と向き合う

### 「本題材で願う学び」から抽出した要素

- |                                 |
|---------------------------------|
| (i) ポピュラー音楽ならではの演奏表現やその楽しさを実感する |
| (ii) 多様な音楽についての理解を深める           |
| (iii) 音楽に対する考え方を広げたり、深めたりする     |



- |                       |
|-----------------------|
| (i) 音楽の感性にかかわる学び      |
| (ii) 音楽の多様性にかかわる学び    |
| (iii) 音楽の向き合い方にかかわる学び |

表1から「教科の主張（教科で願う子どもの学び）」の(i)～(iii)が「本題材で願う学び」の(i)～(iii)に対応していることがわかる。ここでは(i)を「音楽の感性にかかわる学び」、(ii)を「音楽の多様性にかかわる学び」、(iii)を「音楽の向き合い方にかかわる学び」とする。(1)で論じた「ありたい自分」を思い描く子どもの姿が授業者の願う学びの姿とどのように関連しているかを考察していく。

#### (i) 音楽の感性にかかわる学びについて

音楽科の学びには子どもの感性が深くかかわっており、本題材においても感性にかかわる記述を追求のレポートに記述している。

- ジャズらしさを追求したところ、音が結構高めな方がジャズらしいと感じた。これは多分高い音の方が低い音よりも楽しい雰囲気が出るからだと思った。
- それぞれのグループの音を聞いて感じたことは、以前創作した「カノン進行」のときのように1～2個ずつ音が上下している感じも楽しい雰囲気になる工夫の一つなのかなと思った。(第3時の追求の記録)
- 伴奏の音を高くし、音を3音から2音にしました。音を短くきって伴奏が変化すると、より軽快に、明るくなった気がします。短く切っているので、弾むような感じもしました。(第6時の追求の記録)

子どもたちは演奏活動に取り組むことを通して、根拠をもってジャズらしさについて考えを深めていたことがわかる。「高い音の方が低い音よりも楽しい雰囲気が出る」とあるように、「音楽を形づくる要素」と「感覚」とを関連づけながら、他のグループの演奏を感じ取っていたことが伺える。これは演奏をしながら自分の感じ方について考えをもつだけに留まらず、**音楽を形づくる要素とかがわらせて感じとることによって音楽の感性が磨かれた姿**であると考えている。



一方で表現したいという感覚はもっているものの、技能的な壁があり感性を生かし切れなかったグループもあった。自分たちの思う「ジャズらしさ」を表現する技能がないため、「表現したいこと」と「表現できること」の壁に何度もぶつかっていた。そのもどかしさがドラムの演奏によってジャズらしさを出せなかったり、陽気にしようと思ったのに不協和音がかさなることによって暗くなってしまったりする、という子どもたちの姿につながっていた。

授業後に行った子どもたちへのインタビューでは、以下のような発言があった。

- A アレンジはずっと意識していた。でも即興でやるとなると、アレンジを頭に入れすぎて、メロディーをミスる。即興じゃなくてある程度決めていた方が安定感が出るかな
- B ごちゃごちゃするから、先にみんなで出しておいて、まとまりつけようって。
- C 中間発表でアレンジしたら、本来の譜面通りではないから覚えられていなくて、ミスタッチとか、どこをやっているかがわからなくなって。主旋律をやっていたが、演奏できなくなって全体の質が落ちちゃった。今回は自分なりにアレンジの方針を固めて、その通りに弾けるように繰り返し練習した。
- D アドリブを入れたけれど、全体として方向性がバラバラになった。  
二つに合うようにドラムをしなければいけない。同じテンポでドラムをしようとするイメージがズレちゃう。
- C2 元の譜面のリズムと合わなくなる。
- D2 自分たちで打てる技術がないので、メトロノームとなりました。

自分たちのイメージと違う演奏になったことや、「アレンジを頭に入れすぎるとメロディーをミスる」「ミスタッチとか、どこをやっているのがわからなくなって」「自分たちで打てる技術がないので、メトロノームとなりました」など、演奏技術が追いつかない部分で「ありたい自分」を実現できないと考えている子どもたちの姿もあった。

音楽の授業において、また本題材において、技術的な部分は求めない授業者の思いはあるが、やはり子どもたちとしては自分たちの思う「ジャズらしさ」を表現したいと思っていただろう。その辺りが、「授業者の願う学び」と「ありたい自分」との差異なのではないかと感じる。

ただし、「表現できないこと」に出会ったときに、子どもたちの感性が働いていたことも重要なポイントである。「葬式みたいに暗くなった」「なんかジャズっぽくない」という気づきは、頭の中にジャズらしさがイメージされているからこそ出てくる発言である。子どもたちがルイ・アームストロングの演奏を聴いたり、仲間の演奏を聞いたりする中で、グループで表現したい「ジャズらしさ」を確立し、個性豊かな演奏ができたことは、ありがたい自分を存分に体現した姿であると言えるだろう。

このように、子どもたちが「ありたい姿」を思い描いて、その表現の壁にぶつかったとき、何とかしてそれを乗り越えようと、グループで試行錯誤する姿は、一つの願う学びの姿であると考えられる。

(ii) 音楽の多様性にかかわる学びについて

追求レポートには感性的や技能的な視点から音楽の学びを深めるだけでなく、聖者の行進を演奏することで、多様な音楽の在り方について考える以下のような記述がみられた。

ジャズっぽくする為に何より大切なのは適当さと軽さである。私は家に帰ってから母に「ジャズとは何か？」と聞いた。すると、ジャズは「仲のいい人が集まって、好きなように演奏する。定型は存在せず、自由に。けして適当ではない」ものであるという答えが返ってきた。その後母の好きなジャズなどを聞かせてもらったが、確かにその通りであるように感じた。(中略)

Dさんのいるグループの演奏を聞いても、やはり、人と楽しくやることが重要だったことに気づく。彼女たちは演奏が終わったあとも、楽しそうに笑っていた。そういう、「楽しむ心」が、ジャズに限らず、全てにおいて重要だった。それがないと、いいものは創れない。好きな人たちと一緒にやれば楽しめる。また、他のグループのジャズを聞くことによってもジャズに対する考えが変わりました。今、ジャズを例えるなら、それはケーキだと思います。ベースはスポンジとクリーム。綿あめとかのはかない感じじゃなくて、もっとどっしりした、それだけでおいしいもの。トランペットなどの音はスポンジの上のフルーツやチョコレート。それぞれ特有の味があるからスポンジとともに引き立てあう。ベースの揺るぎない安定感と、トランペットのスパイス的な音の要素がジャズという素晴らしいケーキをつくりあげる。

上記のレポートを書いた子どもは、始めに一人で演



奏を追求すると決め取り組み始めた。しかし母のジャズに対する考え方や、仲間の演奏を聞く経験を通して、自分のジャズに対する感覚を広げていったことがわかる。音楽での学びには、各々の感性にもとづいて演奏を磨くことに限らず、豊かな人とかかわりの中で音楽に対する感性が磨かれたり、多様な音楽の視点が得られたりするものなのではないか。

また、別の子どもの追求レポートの記述は以下の通りである。

最初のジャズの聴き比べからジャズの認識が変わった。聴いているだけだと、ちょっと気だるそうに弾いているなあ、大人数だと楽しそうだなあ、自由だなあとか演奏全体について感じることはいくつかあった。実際自分たちが弾いてみて、個人個人が工夫をして演奏していて、その個人が集まった集合体がジャズなんだ、と感じた。私がこの前公園でジャズを弾いていた人の演奏を聴いた時、一人で演奏していたのに、大人数のように楽しんでいるようすを感じたし、音楽が好きなんだなあと伝わってきた。

「実際自分たちが弾いてみて、個人個人が工夫をして演奏していて、その個人が集まった集合体がジャズなんだ」といあるように、実際に自分が演奏することで「聴く」だけでなく、「演奏する人」の立場になって多様な音楽のかかわり方ができていると言えるだろう。ストリートパフォーマーの演奏に心を寄せ、その楽しんでいるようすまで感じられる様は「音楽の多様性」を自覚している姿であったと考えられる。

### (iii) 音楽の向き合い方にかかわる学びについて

第5時の授業後に行ったアンケートには音楽との向き合い方について以下のような記述がみられた。

(質問) あなたが考える音楽のおもしろさは何だと  
思いますか？

- 曲を作曲した作者の意図だとか楽譜通りではなく自分が表現したいように音の強弱や長さを変えたり、意図せずとも感情的な間が開いたり音が大きくなったり伸ばしたり速くなったり、演奏者ではなくても聴いている側の人もそんな感情を感じ取れるところが面白いと思います
- 音を楽しめば、音楽になること。技術や知識も、よりよくするためには必要だけど、初めは気持ちだけで挑めるところ。初めのハードルが低い。概念が広いから、なんでもアリなところ
- 発想が無限にあること。展開の仕方や音の使い方

など、創造性に溢れていると思う

- 正解がないこと (2名記述)

アンケート結果から、ジャズらしくありたい姿を思い描いていた子どもたちの多くが、音楽のおもしろさとして、技能面よりもジャズ音楽を演奏する入り口に立った際の気づきを記述している。そして、それらは授業者が願う学びである。

つまり、本題材において子どもたちは音楽と向き合う中で、子どもたちが思い描く「ありたい自分」と授業者の「願う学び」の重なりがあったと言える。

またアンケートでは、音楽のおもしろさについて回答する際10名の子どもたちが、「自分が(から・の・で・なり)」という言葉を使って表現をしていた。

- 自分が好きなように表現したいことを表現できる
- 自分から音楽を作れる楽しさ
- 自分が表現したい通りに、表現させてくれる。こだわられるところは、とことん追求し続けられること
- 誰でも自分なりのものを作ることができ、先人たちがつくり挙げたものを自分なりにアレンジできるところ
- 自分の考えるらしさを自由に表現できること
- 自分の思いを一人一人が表現できて、そこからいろんな音色が出せる。自分の思った通りに音を出すことで、楽器によって音色が違って個性が出ると思う
- 完全な正解がないことジャズとか特にそうだけど、自分なりの正解を見つけられるところ

彼らは、音楽を作曲者や作詞者の作った楽譜通りのものという認識だけでなく、音楽は演奏者自身のものにもなり得るということを実感している。「こうでなくてはならない」音楽ではなく、「こうであってもいい」音楽といった感覚なのかもしれない。

本題材では主に演奏者であった子どもたちも、別の題材や日常生活、これからの将来において聴き手となる機会は多くある。その際、「こうであってもいい」音楽を実感した子どもたちは、音楽を聴いて、「この演奏上手だな。orこの演奏は上手ではないな。」のみで終わらないだろう。「この演奏は上手ではないな。」と感じてしまうような音楽を聴いたときも、「だけど、なんかいい。」「CDとは違うけど、なんかこっちの方が好き」「よくわからないけど、なぜか鳥肌立った」という感覚を抱き、演奏者の「自分が」「自分なりに」「自分の思い」「自分らしさ」を感じ、受け入れ、それらも含めて演奏(音楽)を味わうのではないだろうか。(もしかしたらそれらは無自覚かもしれないが。)演奏者の思いや

## 音楽科授業実践1

感情や意図に思いを馳せ、それを想像出来る人は、相手を豊かに受け止めることのできる人と言えるだろう。それこそが、音楽科が育みたい「**音楽を愉<sup>たの</sup>しみ、心豊かな人**」なのだと言える。

今回、「自分が(から・の・で・なり)」という言葉を使って音楽のおもしろさを語った子どもたちが、聴き手になるときが楽しみである。このようなあらわれから本題材を通して、音楽に対する向き合い方が変化したと考えられる。

また、豊かな聴き手の感覚が芽生えている子どもたちもいた。

- 曲を作曲した作者の意図だとか楽譜通りではなく自分が表現したいように音の強弱や長さを変えたり、意図せずとも感情的な間が開いたり音が大きくなったり伸ばしたり速くなったり、演奏者ではなくても聴いている側の人もそんな感情を感じ取れるところがおもしろいと思います
- 人によってとらえ方や考えかたが変わること
- 発想が無限にあること。展開の仕方や音の使い方など、創造性に溢れていると思う。また、演奏者によって同じ楽譜が違うものになること。演奏者の解釈や使う楽器、感情によって変化するのがおもしろい
- 正解がないこと？ 同じ音、曲でも人によって感じ方とかの価値観が違うこと
- つくるという見方だと、人それぞれあるから。同じ楽譜を演奏しても、人によって異なるから
- 同じ曲でも、弾く人や弾き方によって変わるため、全く同じ曲は存在せず、アレンジは無限大ということ

このように音楽と豊かに向き合うことのできる姿から、子どもたちに育まれた多様な音楽の価値を尊重する心の豊かさを感じ取ることが出来るだろう。これは音楽科という教科の枠におさまらず、子どもたちの人間像(人間性)として広がっていくと考えられるのではないか。子どもたちは、文章を読んだときに、その言葉に込められた書き手の意図を想像するかもしれない。仲間の行動を見たときに、その行動を生んだ思いを慮ることが出来るかもしれない。普通(と世の中が言っているいるもの)とは違う嗜好や習慣や考えをもった人を「それもありだよな!」と認めることが出来るかもしれない。

ジャズの題材を自分たちで演奏することを通して、子どもたちは自分たちなりのポピュラー音楽の本質に触れることができた。ポピュラー音楽のジャンルとひ

とくくりと言っても無数の音楽が存在しているため、本題材で触れることができるポピュラー音楽の本質はごくわずかで、限定されたものになるが、子どもたちは自分たちの演奏体験や鑑賞した体験の中から見いだしたことをもとに、音楽と豊かにかかわっていくことができるだろう。

以上の(i)~(iii)のことから、本題材に親しみ「ありたい自分」を思い描くことは、授業者の「願う学び」と関連していることがわかった。

また、音楽について感性を働かせ、多様性を感じ、向き合い方について新たな視点を得ることは音楽を「愉<sup>たの</sup>しみ心」に通じており、音楽科で育みたい人間像に迫ることができた姿とも言えるのではないだろうか。

## 本年度の実践における成果と課題

### 1 「教科で育みたい人間像」について

#### (1) 成果

音楽の授業の中で「このように演奏してみたい」という姿がみられただけでなく、「公園で演奏している人は一人であったが大人数のように楽しんで」と音楽を表現する人の心情まで寄り添った考えが表れたことは大きな成果であると考えられる。授業の中で体感した自分なりの音楽のフィルターを通して、世の中の人の営みを感じたり、自分の周りにいる人と音楽を通して共感したりする姿は、これまでの学習の積み重ねであり、人間像に迫る姿であると考えられる。

#### (2) 課題

「教科で育みたい人間像」である「自ら音楽を愉しむ、心豊かな人」は授業の中で培われたものかどうかは授業者が見とることは非常に難しいことであると感じた。題材の最終レポートの中では(1)のようは姿がみられたが、「感じ方」「感性」の部分を見とっていく困難さがあった。しかし音楽の特性上、活動を通してどのように感じたか、音楽的な見方・考え方はどのように変化したかを丁寧に見とることが人間像に迫る姿や学びの自覚に迫っている姿かどうかを判断するために必要なことであると考えられる。

### 2 「教科で願う学び」について

#### (1) 成果

今回の題材を通して、「音楽に対する感性を働かせながら、音や音楽と向き合う」姿を十分に見とることができた。その要因として、子どもの実態に合った題材であったことがあげられる。ジャズが生まれた年代はポピュラー音楽のスタートとほぼ同時期であるため、ジャズを学習することは音楽文化がどのように発展してきたかを知るきっかけになったのである。また、演奏する人の立場になって音楽の楽しさを実感できる題材として、リコーダーやキーボード等の旋律楽器を用いてアンサンブルに取り組んだことも、音楽と向き合うためのよい要素となった。

これまでに学習した、音楽をつくる人の視点を生かしつつ、曲の特徴や演奏スタイルについて考えながら演奏することで、授業で扱う音楽と自分たちの生活の中にある音楽とのつながりが実感できる題材になるのではないかと考えている。これからも音楽ジャンル・文化的時代的な背景・音楽表現に取り組みやすい題材といった視点を大事にしながらか授業構想を行っていききたい。

#### (2) 課題

グループで追求する過程で、技能の壁に当たる子どもの姿が多くみられた。授業者は、曲の完成までたどり着くことを望んでおらず、本題材が音楽表現を追求していくきっかけとなればよいという考え方をしていたが、題材構想の最後に「人前で発表する」場面を設けてしまったせいで、子どもたちにとっては「曲の完成を目指さなければならない」という潜在的教育効果を与えてしまっていたのである。本題材を人前で発表することを前提とするのは、適していなかったのではないかと感じた。近年の、動画投稿の文化を考えると、聖者の行進を自分たちなりに楽しく演奏することに焦点を当てた題材構想ができたのではないかと感じる。

ジャズの技能面についても、ジャズらしさを思い描く中の必要な場面で、授業者側からのアプローチがあってもよかったのかもしれない。ジャズ特有の音階や演奏方法について、全体に教える場面があってもよかったのかもしれないが、特有の演奏技法を用いなければいけないわけでもなく、演奏技能がなければジャズが成り立たないというわけでもないが、題材を味わいながら「もっと演奏技能面で伸びたい」という子どもの現れに応じて、計画的に提示することはできただろうと感じた。

### 3 その他

#### (1) 題材の実践における失敗例

「ありたい自分」を思い描くことができない音楽の授業とは、どのようなものであるか。それは、技能面から題材に触れ、どのようにすればこの曲が演奏できるのだろうか、という視点で音楽に触れる授業であると考えられる。別の題材において、「ヒップホップはどのように歌われているのか?」といった技能面を導入として授業を提示したとこ

## 音楽科本年度の実践における成果と課題

ろ、授業者の思いに反してありたい自分が膨らむことがなかったのである。このことから、いかに音楽科がイメージーションを働かせ、感性の側面から人の思考にアプローチしている教科であることを感じた。音楽に卓越した人へのアプローチであれば、リズム、拍子、歌唱方法とうの技能面からの授業も成立するのかもしれないが、学習者である中学生にとっては音楽を人前で演奏すること自体が「非日常」であり、演奏する活動に自然に向かうこと難しいことであると感じる。

どのように感じたかやどのように演奏を行いたいかといった、内面的な部分にこそ音楽を学習する大切さや価値があるのではないかと感じた。

### (2) 音楽科における題材選定の難しさ

今回の題材は、もともと、教育芸術社の器楽アンサンブルのページに記載されているものに着想を得ている。教科書での扱いは、リコーダーによる2声のアンサンブルであり、この曲を通して本来学ぶべきことは、「アーティキュレーション（音の切り方やつなげ方）」という扱いになっている。音楽を楽譜通りに演奏する中で、表現方法について学ぶ、という西洋音楽の発想では、曲を崩して演奏するという発想は生まれないのである。

以前から本題材を「アーティキュレーション」を学ぶべき教材として扱う中で、子どもたちが自然とシンコペーションや装飾音符を入れて演奏する姿がみられた。「聖者の行進」について調べていくと、曲自体が黒人音楽の文化（黒人霊歌）の中で発祥したものであり、ジャズアレンジ化された曲ではなく、ジャズのルーツそのものだったということが判明した。このことを踏まえて、授業者の「ポピュラー音楽」の楽しさを感じてほしいという授業観を加えていった結果題材として構想を行うことができた。

このように、曲自体に時代背景や文化的背景があり、なおかつ子どもたちに馴染みのある旋律の曲で、授業者の授業観に沿った曲が題材として適切であるとわかるが、そのような曲は、ほとんどないのではないかと感じる。音楽としての価値があったとしても、その価値に子どもが心ときめかせることが出来なければ題材として成立しない。また、子どもたちに馴染みがある音楽であっても、授業者の思いが反映されない音楽であれば授業として成立しないのである。

教科の対象世界と向き合うためには、それに見合った、教科の対象世界の奥深さや多様さが感じられる題材選定を行う必要がある。そして、その音楽に子どもたちが触れたときに心ときめかせる音楽の体験ができるのではないかと感じる。これからも題材の価値を大切にしながら授業構想を行っていきたい。

### 参考文献・参考資料

- ・相倉久人（2007）『新書で入門 ジャズの歴史』新潮社。
- ・水城雄（2000）『誰も教えてくれなかった ジャズの聴き方』ブックマン社。